様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ５ 月 １７ 日現在

機関番号：１４１０１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2015～2016
課題番号：１５Ｈ０６１１３

研究課題名（和文）後期高齢者の包摂を目的とした高齢者インプロ実践プログラムの開発

研究課題名（英文）Development of Improvisational Theatre Program to Include Latter-stage Elderly People

研究代表者
園部　友里恵（Sonobe, Yurie）

三重大学・教育学部・特任講師（教育担当）

研究者番号：８０７５５９３４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、後期高齢者や身体的・認知的課題を抱える者も包摂可能な高齢者インプロ実践プログラムを開発することであった。①国内外のインプロ理論、高齢者学習論、介護福祉研究の文献レビュー、②海外の先進的事例調査、③国内でのアクションリサーチを通じて、高齢者の学習活動の特徴、舞台に立つことを通じた高齢者の意識・行動変容のプロセス、高齢者インプロ実践を支えるファシリテーターの役割について明らかにした。その結果、多様な高齢者が参加可能なインプロ実践プログラムと実践コミュニティを開発・創出することができた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research was to develop improvisational theatre program which could include latter-stage elderly people, especially people with physical or cognitive decline.
This research consisted of 3 projects: 1) review theories of improvisational theatre, educational gerontology, and research of care and welfare, 2) participant observation in the senior centers which applied improvisational theatre to memory care for people with dementia and the impro classes of Stagebridge which is performing arts school for elderly people, and interview to their facilitators, 3) action research on “ Kururu Senior Impro ” in Kashiwa, Chiba.
This research revealed features of learning activities for elderly people, process of transformation through theatre experience, roles of facilitator. Finally, the author could develop improvisational theatre program and make the community which could included various elderly people.

研究分野：芸術学

キーワード：インプロ　演劇教育　高齢者学習　高齢者演劇　生涯学習　ワークショップ　後期高齢者　包摂

１．研究開始当初の背景

（1）超高齢社会の課題と高齢者の演劇活動への関心の高まり

高齢化率 25.1%（2013 年、内閣府）という超高齢社会を迎えた日本では、平均寿命の延伸、団塊世代の高齢期参入等を背景に、これまで福祉や保護の対象とされてきた高齢者が、自ら学び、活動する主体として捉えられつつある。そうした中で、近年、高齢者の演劇活動が注目を浴びている。応募者は、これまで高齢者が受動的な「観客」として位置づけられてきた点、そして近年、高齢者だからこそ可能な表現を追求した作品創造活動（「シニア演劇」）が 1 つの演劇スタイルとして確立されている点を示した（園部 2015）。

日本では、高齢者の学習や活動に関する研究は、主に生涯学習論の領域で行われている（堀 1999、牧野 2009 等）。しかし、先行研究で捉えられるのは健康で自立した生活が可能な「アクティブシニア」であり、後期高齢者や身体的・認知的課題を抱える高齢者の活動の理論は明らかにされていない。一方、介護・福祉領域の研究では、老人ホームのリハビリとしての演劇実践（川口 2006）や、他者との関係を重視した身体活動「遊びリテーション」（三好 1999）等、演劇やゲームを活用した優れた実践も見られる。しかしこれらは介護・福祉領域内での言及に留まり、類似性のある芸術領域や高齢者学習論・活動論の視点からは充分に検討されていない。

後期高齢者や認知症高齢者の活動の場の創出やそうした人々との共生は、現代日本社会の重要な課題である。本研究は、これまで乖離していた高齢者の教育・学習研究と介護・福祉研究を演劇やパフォーマンスを介して接合させることで、こうした課題に応えていくものである。

（2）インプロ（即興演劇）への着目

インプロとは、台本も、事前の打ち合わせもない中で、その場で起こったことに目を向けながら、他者とともに物語を生み出していく即興演劇のことである。1950 年代の英米で俳優訓練等を目的に発展し、今日では世界各地の様々な教育・学習的場面での活動に活用されている。日本のインプロ研究では、学校や企業でのインプロ実践の教育的効果が明らかにされてきた（高尾 2006 等）。国外では、一部の研究書（Frost & Yarrow 1998 等）を除き、出版物の多くはゲーム集や手引書である。したがって、高齢者対象のインプロ実践を検討した研究は国内外共に見られない。

本研究がインプロに着目する理由は、①シアターゲーム等と呼ばれるゲームを通して学ぶことができ（Spolin 1986, 1999、Johnstone 1999）、演劇未経験者でも参加が容易であるため、②事前にセリフの暗記や演出通りの「正確な」動作は求められないことから、認知的・身体的な課題を抱える高齢者の参加不安を軽減しやすいと考えられるためである。

（3）アクションリサーチの場としての高齢者インプロパフォーマンス集団「くるる即興劇団」結成経緯

研究代表者は 2009 年よりインプロの理論と方法を国内外で学び始め、2010 年以降、学校、地域等でインプロを活用した取り組みを実施してきた。2013 年、千葉県柏市豊四季台団地（高齢化率 41.9%）で高齢者対象のインプロを活用した生涯学習講座を開始し、本研究のアクションリサーチを実施するための基盤づくりに取り組むとともに、インプロを通じた高齢者の学習の特徴について研究を進めてきた。そこで課題化されたのが次の 2 点である。

①後期高齢者、身体的・認知的課題を抱える者の参加

豊四季台インプロ講座の参加者は、70 代後半～80 代半ばの者が中心であった。中には補聴器や杖を使用している者、日常的にデイケア施設を利用する者もおり、地域の生涯学習講座には、こうした身体的・認知的課題を抱える者の参加ニーズも一定数あることが明らかとなった。そこで、彼ら・彼女らを排除するのではなく、ともに舞台に立ち、学びあえる関係づくり・環境づくりを可能とするプログラムを、介護・福祉領域の研究・実践知見（特に、リハビリテーションやレクリエーションに関するもの）を取り入れながら開発する必要性を感じた。

②「受講者」から「パフォーマー」への役割の転換

本研究は、これまでの講座を発展させ、インプロを自ら主体的に学び、パフォーマンスを行う者として高齢者を捉えることを目指す。そのために、①高齢者インプロパフォーマンスグループを結成し、②彼ら・彼女らをアクションリサーチの研究「参加者」として位置づける。なぜならば、継続性が担保できるグループ活動で高齢者と協働してインプロ理論を実践的に探求することで、当事者の視点をより重視したプログラム改善が実現できるためである。

２．研究の目的

本研究の目的は、国内外のインプロ理論、高齢者学習論、介護福祉研究の文献レビューおよび海外の先進的事例調査、国内でのアクションリサーチを通じて、後期高齢者や身体的・認知的課題を抱える者も包摂可能な高齢者インプロ実践プログラムを開発することである。開発するにあたり、具体的に明らかにするのは以下の 3 点である。

- インプロ実践における高齢者の姿、およびそれを支援するファシリテーターの役割から、高齢者の価値観や学習活動の特徴を明らかにする。

・高齢者のインプロパフォーマンスの特徴、および舞台に立つという経験によって生じる高齢者の意識・行動変容のプロセスを明らかにする。
・インプロ理論が後期高齢者や身体的・認知的課題を抱える者を包摂する学習コミュニティの創出にどのように接続するのかを検討する。

３．研究の方法

本研究では、下記 3 つの方法により、後期高齢者や身体的・認知的課題を抱える高齢者も包摂可能な高齢者インプロ実践プログラムの開発・提案を試みた。

(1) 文献レビュー

生涯学習論、高齢者学習論、成人学習論およびワークショップ研究や演劇教育研究に関する先行研究を整理するとともに、介護・福祉研究の先行研究において高齢者がどのような存在として捉えられてきたのかを表現・身体・活動という視点から検討する。また、加えて、介護・福祉領域における演劇や他者との交流を促すゲームを活用したリハビリテーションやレクリエーション実践のプログラムについても整理する。そして、それらとインプロ理論、演劇教育研究、パフォーマンス研究との接点を探る。

以上の文献レビューを通して、教育・学習研究と介護・福祉研究をつなぐものとしてインプロやパフォーマンスを捉え、下記(2)(3)で得るデータを分析するための枠組みを設定する。

(2) 海外先進的事例の調査

先進的実践として、米国カリフォルニア州オークランドおよびサンフランシスコにおける下記 4 つの実践を対象とし、各実践の参与観察調査、運営者・実践者・実践参加者等へのインタビュー調査を実施した。

①非営利高齢者パフォーミングアーツスクール「Stagebridge」のインプロクラス
②老人介護施設「Mercy Retirement & Care Center」および「AlmaVia San Francisco」のインプロを活用した認知症メモリーケア実践
③非営利団体「Senior Center Without Walls」におけるグループ電話回線を用いた高齢者対象の非対面型インプロ実践
④多様な世代を対象にインプロ実践を行う団体「BATS Improv」のインプロ実践

(3) 千葉県柏市豊四季台団地における高齢者インプロ実践のアクションリサーチ

(1)(2)で得られた知見を参照しながら、千葉県柏市豊四季台団地におけるアクションリサーチも並行して進めていく。

アクションリサーチの場となるのは、2015 年 7 月に同団地在住高齢者を中心に結成された高齢者インプロパフォーマンスグループ「くるる即興劇団」である。同劇団において、インプロのワークショップを 1 か月に 2 回、パフォーマンスを 3 か月に 1 回の頻度で実施する。これらの際には、毎回、ビデオカメラ（2 台）によって多角度から参加者およびファシリテーターの様子を記録するとともに、終了後に実践記録を作成する。そして、ワークショップ後には、グループインタビュー調査を行う他、個人の学びを言語化するため「コメントシート」を各自記入してもらう。パフォーマンス後には、グループインタビュー、コメントシート記入に加え、個別インタビューも実施する。そうしたファシリテーターと参加者の協働による省察を通して、次のワークショップ・パフォーマンスの設計の改善へとつなげていく。

なお、ファシリテーターは基本的には研究代表者がつとめるが、他の世代を対象にインプロワークショップを行う実践者も適宜ゲストファシリテーターとして招き、参加者とのディスカッションを通して、高齢者のインプロ実践の特徴について検討していく。

４．研究成果

(1) 本研究で得られた知見

①高齢者インプロ実践のファシリテーター（講師）の特徴

非営利高齢者パフォーミングアーツスクール Stagebridge のインプロクラスでは、講師は、高齢者の理解能力、身体的特性に合わせたゲーム・活動の選択を行っており、参加者の様子を観察しながらも、過剰に配慮しないように心掛けていることが示された。また、講師は、上記に加え、参加者本人にとって無理のないレベルでの参加が可能となるような環境を整えていることも明らかとなった。例えば、講師が参加者に対して「疲れたら座っても良い」という声掛けをしていないにもかかわらず、参加者は自分の身体の状態に合わせて自由にゲームや活動への参加の仕方を変えていた。こうしたことが可能となるには、座りたいと思ったときにすぐに座れる位置に椅子が置かれているという物的環境、また、他の参加者の大半が立っている中で自ら座ることを選択しても活動への参加が認められると思える心理的環境が整う必要がある。

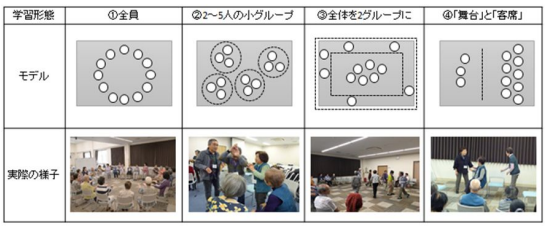
認知症高齢者に対しインプロを活用した認知症メモリーケアを定期的に行う Mercy Retirement & Care Center および AlmaVia San Francisco では、インプロのゲームのルールを理解できない高齢者の逸脱した言動をも物語のアイデアとして取り入れながら、活動を進めていることが明らかとなった。すなわち、ファシリテーターが、「できない」高齢者の言動を「失敗」や「誤り」ではなく「新

たなアイデア」と捉えることによって、多様な高齢者の参加が可能となっていることが示された。

グループ電話回線を用いたインプロ実践を行う Senior Center Without Walls では、ファシリテーターは、参加者全員を把握し「聴くだけ」の参加者も受け入れること、特定の参加者が長く話し続けないようにすること、自身を「指導者」ではなく「ともにインプロを楽しむ者」と捉えること、などに気をつけながら実践を進めていた。こうしたグループ電話回線を用いた非対面型のインプロ実践は、自力で家を出ることが困難な高齢者や、視力に課題を抱える高齢者も包摂し得る場となっていた。

②高齢者インプロ実践の学習形態の特徴

くるる即興劇団の稽古では、ワークショップ形式が用いられていた。その中で、a.全員、b.2～5 人の小グループ、c. 全体を 2 グループに、d. 「舞台」と「客席」という 4 つの形態が、インプロのゲームの主旨や高齢劇団員の様子を考慮しながら即興的に選択されていた。こうした学習形態をとることで、高齢劇団員が、誰かに「見られる」という感覚を負担なく体験し、受動的な講座の「受講者」ではなく、パフォーマンスを行う主体として活動できるようになるほか、高齢劇団員同士がふれ合う機会が生み出され、多様な価値観を持つ参加者がいることを受容しながら、ゆるやかな関係を構築していくことが可能となっていた。



図：くるる即興劇団の稽古における学習形態

③「失敗」と「老い」

インプロ実践における高齢者の変容としては、新たな表現を生み出す要素として「失敗」を肯定的に捉えるようになったことが挙げられる。

高齢期の老いに伴う身体的・認知的な「衰え」は「できないこと」と語られ、学習の阻害要因として捉えられる場合がある。しかし、事前に練習や打ち合わせをせず即興的に物語を生み出すインプロでは、「失敗」は起こって当然のものと考えられている。そして、インプロにおける「失敗」は、新たなアイデアや表現として見なされるほか、コミュニケーションを促したり、その場の雰囲気を良くしたりする等、学びの材料となる肯定的な要素として捉えられる。高齢劇団員たちは、こうしたインプロの「失敗」に対する考え方を、インプロを実践する中で学び、また、集団としてそうした「失敗」の考え方を共有することで、次第に「失敗」を肯定的に捉えるようになっていった。

（2）本研究の意義

①演劇研究領域の問い直し・拡張

本研究は、これまで受動的な「受講者」「観客」であった「高齢者」という存在が、インプロという演劇形態においてはパフォーマンスの主体として位置づけることができる点を見出した。したがって、本研究は、日本の演劇研究でこれまでほとんど対象とされてこなかった「高齢者」の視点を加えることで、演劇研究の対象領域を拡張し、問い直すことを促すものであるといえる。

②教育・学習研究と介護・福祉研究の接合

これまでいわゆる「健康」で「元気」な高齢者は教育・学習研究、そうでない高齢者は介護・福祉研究、というように、高齢者をめぐる研究領域は分断されていた。本研究ではそれらを接合させ、後期高齢者や身体的・認知的課題を抱える高齢者を包摂しうるプログラム開発に挑んだ。その結果、多様な高齢者たちが「老い」をめぐる心身の状態を問わずともに演劇活動が可能となる実践コミュニティを創出することへと結びついた。加えて、本研究が開発したプログラムは、生涯学習講座のみならず、地域の老人クラブの活動、介護施設等でのレクリエーションでも実施できる汎用性の高いプログラムとなっていることから、広く実践現場にも貢献しうるものとなったといえる。

（3）今後の展望

本研究の残された課題として、「高齢者インプロ実践を担うのは誰か」という点が挙げられる。

本研究では、高齢者を「受講者→パフォーマー」、すなわちインプロ講座をただ受講するのではなく、自ら主体的に学びパフォーマンスを行う「パフォーマー」へと捉え直したアクションリサーチを試みた。その結果、現在、後期高齢者や身体的・認知的課題を抱える高齢者も含め、劇団に参加する全ての高齢者がパフォーマーとして舞台に立つことが継続できている。しかし、劇団の稽古や公演時には、研究代表者を中心とする若手演劇実践者が進行・演出を担っていたため、高齢劇団員だけでは活動を進めていけないプログラムになってしまっている。そしてそれは、若手演劇実践者の価値観に高齢者を当てはめることにつながってしまう。

こうした課題を解決するには、「受講者→パフォーマー」という高齢者の役割転換をさらに発展させ、「パフォーマー→ファシリテーター/演出家」、すなわち高齢者自身の主体的な演劇活動を促すために、稽古を進行するファシリテーション技術や、パフォーマンスをいかに「見せる」かといった演出の役割を

高齢者自身が担えるようにしていく必要がある。そうすることで、高齢者自身が自らの感性に基づいた主体的な作品創造活動を継続的に行っていくことが可能となる。また、そこに若手演劇実践者が関わる場合も、高齢者の持つ表現の可能性を制限することなく効果的に支援する立場として、高齢者と協働していくことができる。

以上のような本研究によって見えてきた新たな課題に取り組むため、研究代表者は、若手研究（B）「高齢者インプロ実践ファシリテーターの熟達プロセスの解明と支援モデルの構築」（平成29－31年度）を申請し、先日交付内定を得た。引き続きアクションリサーチを継続することで高齢者インプロ活動の実践的・研究的発展に貢献していきたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計６件）

①園部友里恵「インプロ（即興演劇）の学習形態と高齢者の変容：千葉県「くるる即興劇団」を事例として、老年社会科学、査読有、39(1)、2017、pp.21-30.

②園部友里恵・福田寛之「日本における「インプロ」の導入と展開：1990年代を中心として」、東京大学大学院情報学環 情報学研究 調査研究編、査読無、32、2016、pp.1-24.

③園部友里恵「ナラティヴ・ジェロントロジーの理論と研究動向： Kenyon, G. らの枠組みを中心に」、東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究、査読無、90、2016、pp.1-14.

④園部友里恵「地域における学びの場へのインプロ（即興演劇）の応用：「豊四季台くるるセミナー」におけるインプロ講座を事例として」、社会教育、査読無、833、2015、pp.28-33.

⑤園部友里恵・木村大望「アメリカのシニアシアターカンパニー「Stagebridge」の設立と展開：高齢者を対象としたインプロクラスに着目して」、演劇教育研究、査読有、6、2015、 pp.48-56.

⑥荻野亮吾・園部友里恵「生涯学習・社会参加の支援に高等教育機関が果たす役割（2）：高齢者への学習支援の方法」、文部科学教育通信、査読無、2015.9.14号、2015、pp.26-28.

〔学会発表〕（計８件）

①園部友里恵「キース・ジョンストンのインプロ理論における「失敗」の位置づけ」日本演劇学会 2016 年度秋の研究集会、京都産業大学（京都府・京都市）、2016年12月4日.

②園部友里恵「学習方法としての演出：演劇を学ぶ学生は「高齢者」をいかに捉えたか」日本教育方法学会第 52 回大会、九州大学（福岡県・福岡市）、2016年10月1日.

③園部友里恵「グループ電話を用いた高齢者インプロ（即興演劇）実践におけるファシリテーターの支援と課題：カリフォルニア州オークランド「Senior Center Without Walls」の取り組みから」日本社会教育学会第 63 回研究大会、弘前大学（青森県・弘前市）、2016年9月17日.

④園部友里恵・木村大望「アメリカのシニアシアターカンパニー「Stagebridge」の設立と展開：高齢者を対象としたインプロクラスに着目して」（論文・調査報告合評会）日本演劇学会分科会演劇と教育研究会2月研究会、東京学芸大学（東京都・小金井市）、2016年2月21日.

⑤園部友里恵「「舞台に立つこと」を通じた高齢者の学習：柏市豊四季台団地「くるる即興劇団」の取り組みを通して」日本社会教育学会第 62 回研究大会、首都大学東京（東京都・八王子市）、2015年9月19日.

⑥園部友里恵「インプロ（即興演劇）ワークショップを通じた後期高齢者の学習」日本教育学会第 74 回大会、お茶の水女子大学（東京都・文京区）、2015年8月29日.

⑦Yurie SONOBE, “ Social Participation and Learning through Improvisational Theatre by Elderly People: Analysis of Practice in Japan ’s Super-aged Society ”, 8th International Drama in Education Research Institute, シンガポール, 2015年7月5日.

⑧園部友里恵・福田寛之「日本におけるインプロの導入と展開：1990 年代を中心として」日本演劇学会 2015 年度全国大会、桜美林大学（東京都・町田市）、2015年6月21日.

６．研究組織

(1)研究代表者

園部友里恵（SONOBE, Yurie）

三重大学・教育学部・特任講師（教育担当）

研究者番号：80755934